

— 予告 —

～奈良・学園前教室第2回発表会～

11月16日(日) 15時～

- 於 : ギャラリーGM-1
(近鉄学園前南口より徒歩5分)
- 演目 : 太宰治「葉桜と魔笛」・浅田次郎
「佳人」・藤沢周平「驟り雨」

—お問い合わせは 秋山まで—

■ 朗読 GEN 劇団員募集中

ぜひ、稽古場見学にいらっしゃいませんか。

毎週水曜日18時半から21時

ムーブファクトリーにて

大阪市北区中崎町

(JR天満駅より徒歩10分・地下鉄中崎町駅より徒歩3分)

■ 朗読教室ご案内

～奈良学園前・楽しい朗読教室～

レッスンは 第2、4火曜日 10時から/11時半から
近鉄学園前駅北口から歩5分。サンライト文化教室
にて無料体験、教室見学あり。

お気軽にお越しください。

■ どちらもまずはお問い合わせください。

TEL&FAX / 0742-48-8688(秋山)

メール / akikan@m4.kcn.ne.jp

またはホームページ / <http://r-gen.jimdo.com>

(朗読GENで検索できます)



平岩弓枝
しょうじょうみだれ
猩々乱
宮部みゆき
落葉なしの椎

2014年

10月17日(金) 19時開演 (開場は30分前)

10月18日(土) 13時開演 (開場は30分前)

会場

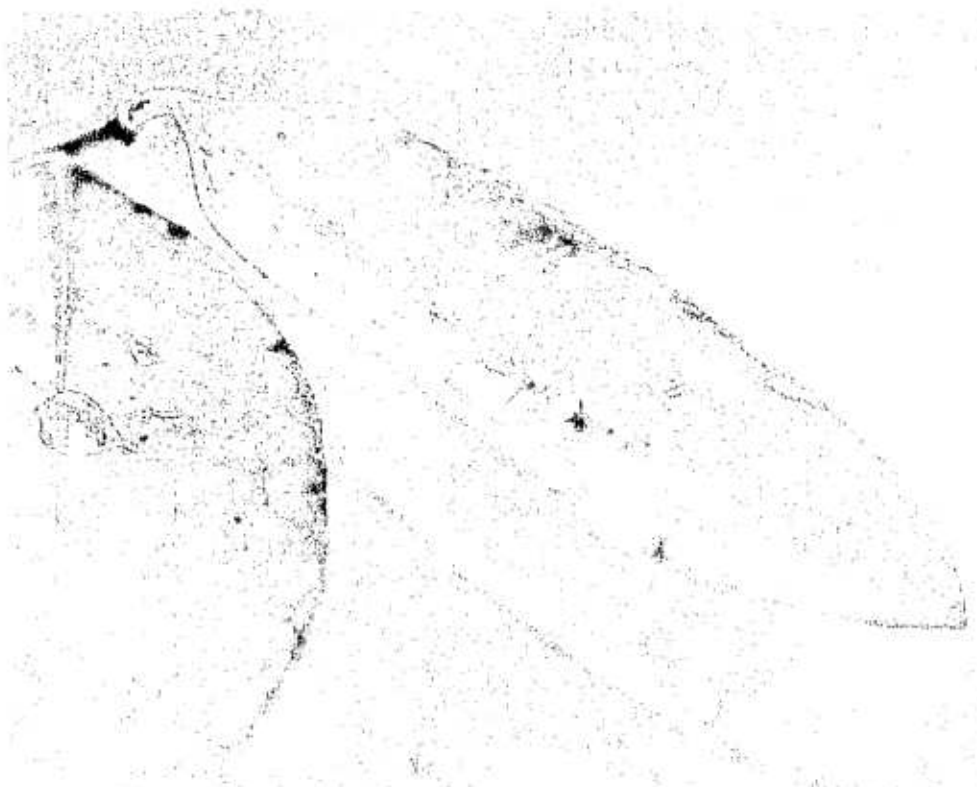
近鉄アート館

あべのハルカス近鉄本店ウイング館8階

朗読 GEN 第12回定期公演

Kintetsu

近鉄アート館



落葉なしの樵

原作/宮部みゆき

上演台本
演出 秋山太加

■キャスト

回向院の茂七 太田淑子
 下つ引・文次 秋山太加
 茂七女房・お里
 菅の女 坂東恭子
 小原屋幸公人
 お袖 村井友美
 小原屋息子
 千太郎 福嶋左知子
 勢吉…………… 田中章恵

猩々乱

原作/平岩弓枝

上演台本
演出 秋山太加

■キャスト

宮増小太郎 福嶋左知子
 妻・綾…………… 村井友美
 春藤庄兵衛 秋山太加
 観世左近太夫 太田淑子
 宮増小左衛門 田中章恵

■特別出演

幸流小鼓方…………… 成田達志
 森田流笛方…………… 左鴻泰弘

■スタッフ

音響…………… 西角秀紀
(布ムーブファクトリー)
 照明…………… 牟田耕一郎
(劇団ママコア)
 舞台監督…………… 佐野泰宏
 殺陣振付…………… 浦田克昭
 ヘア・メイク…………… 五十嵐公子
(日本メイクアップアーティスト協会)
 着付け…………… 奥山みどり
 ヘア・メイク…………… 藤原美弥
 井上三友起
 打越由佳
 竹之内梨沙
 清家さつき
 照明オペレーター…………… 林 沙織里
 宣伝デザイン…………… 桂 瑞子
 記録…………… 小島知光
 制作…………… 丹原祐子
(Office P-1企画)
 音楽選曲…………… 秋山太加
 協力…………… 田中仁美
 亀井恵子
 稽古場協力 布ムーブファクトリー
 印刷…………… 宣光社
 企画・製作 朗読劇団・朗読GEN

■プロフィール

村井友美

誰か一人でもその人の心に残る存在になりたいと思ひ芝居を始める。シアターシンクタンク万化所属。
 次回公演は2015年3月27～29日、芸術創造館にて。
 「チューリングコード～生まれつき涙を流せない男の話～」

坂東恭子

15年前に見たある舞台作品との出会いがきっかけで、そのエネルギーに感動し、舞台の世界に足を踏み入れる。
 芝居、狂言、マイム、踊り、音楽など伝統的なものからコンテンポラリーまで様々な分野に興味を持って活動中。

■プロフィール

成田達志(なりた たつし)
 曾和博朗(人間国宝)、及び曾和正博に師事。
 1988年若手能楽師とともに能楽グループ「響」を結成(～02年)。02年より大倉流大鼓方山本哲也とTTR能プロジェクトを結成。
 能楽堂にとらわれない意欲的な舞台を作る。関西を中心に活動するが、全国を飛び回って能の魅力を伝える。

今後の活動予定
 2014.11.9 「はじめてのお能」
 兵庫県立芸術文化センター

左鴻泰弘(さこう やすひろ)
 杉市和に師事。

能楽協会京都支部、京都能楽会、京都囃子方同明会所属、鴻之会主宰。
 京都を中心に活動しているが、東京、名古屋にも稽古場をおき能管の魅力アピールし、また若い人たちの育成にも力を尽くしている。
 新作能や海外公演にも参加しており、今後ますます活躍が期待される。

能・猩々乱 写真提供
 齊藤信輔(さいとうしんすけ)
 1976年生まれ。能楽シテ方。観世流準職分。
 幼少より父 観世流能楽師・齊藤信隆に指導を受け4歳で仕舞「養老」で初舞台。
 94年 大槻文蔵師に内弟子入門。2004年独立。
 千歳、石橋、猩々乱、道成寺を抜き、海外公演にも参加。学校公演で能の普及に努める。

いあらわし

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。
 ここまで続けてこられましたのも、会場に足を運んでくださるお客様あってのことと、心より感謝申しあげます。
 初めてのアート館での公演に、出演者、スタッフ一同、ドキドキ、ワクワクしています。

朗読GENでは新しい朗読劇を創りたいと様々な試みをしてまいりました。今年、平岩弓枝の格調高い筆致が牙える「猩々乱」が演目の一つです。能の「猩々乱」が題名になっていきます。この作品の世界をより味わっていただきたく、今をときめく囃子方お二人に特別出演を、そして、観世流シテ方、齊藤氏に写真提供をお願い致しました。生演奏と映像と共に、物語をさらに奥深く感じて頂きたいと思っております。

七〇〇年の歴史を背負う古典芸能との出会いで、どんな舞台になるのか、不安と期待がいりまじる緊張感でいっぱいです。失敗を恐れず、「今年の精一杯」をお見せできればと存じます。
 どうか最後までお楽しみいただけますように

演出 秋山太加

しょうじょうみだれ 「猩々乱」——平岩弓枝——

天才型か努力型か

昭和32年、初めて小説を発表したのが30代半ば、その後デビュー以来50年、作家生命を保っている。人気シリーズ「御宿かわせみ」はテレビドラマになり、ご覧になった方も多いと思う。若くして直木賞を受賞したのは、天才型作家とも言えるが、人気作家となり、作家生活をリタイアせず、80歳を越えた今も活躍しているのは、ひとえに努力のたまものか。

最年少で直木賞

初めて小説を発表後わずか2年、「鑿師」で直木賞を受賞。このとき戦後最年少の受賞であった。この後急速に伸びて、たちまち流行作家となる。それ以前は、ほとんど小説らしいものは書いていないということだが、実はその前に書かれた中で最も古い（昭33、26歳）「鬼盗夜ばなし」に昔、朗読教室の発表会で取り組んだことがある。もとの話は茨木童子が渡辺綱に腕を切られ、綱の叔母に化けてその館に行き、切られた腕を取り返すというだけの話。この話を作者は空想を飛ばたかせ、読者の心をつかむ奇想天外な面白い話に仕立てている。大胆で、自由闊達、文章の巧みさも高く評価されており、この若さを考えれば感嘆せざるを得ない。

長谷川 伸は、常日頃、門弟たちに「まず資料を十分に集め、そして、それらを一旦忘れてから、小説を書き始めなければならない」と語っていたそうだが、作品を成功させたのはこの教えを守ったせいではないかと思われる。

人生の転機が、文学の転機

「当時の直木賞選考委員吉川英治氏が、「鑿師」の作者は平岩弓枝（きゅうし）という名の男性とばかり思っていたというのは、単なる笑話というよりこの作品の本質を見事に言い当てた言葉として貴重だと思う。」と、伊

東昌輝氏が述べている。伊東氏は長谷川 伸主宰の新藤会の先輩で、後に平岩家の婿養子となる。

「猩々乱」もこの頃の作品で、いわゆる「師もの」と呼ばれたものである。文章の切れ味が見事で、格調が高く、男性の心理描写が的確に描かれている。大学をでたばかりで、これほど彩の整った、緊張感溢れる作品を書いた平岩弓枝は天才型といえる。

父親は東京・代々木八幡宮の宮司で、1932年、その一人娘として生まれた。幼い頃から長唄や謡の稽古に通い、父親は日本、中国の古典を買い与え、文学好きな伯母は、自分の蔵書を彼女に貸し与えた。父親は日本の古典を暗唱させたが、彼女自身も夢中になって古今の名品を乱読したという。

その筆致が1962年（昭37）頃から変わり始める。結婚、出産、恩師 長谷川 伸の死など大きな人生の曲がり角があり、その後は女性が主人公となるものが多くなる。

日々の苦労や、小さな喜び、悲しみを細やかに描いたものが人気となり、テレビドラマの脚本も手がける。「女と味噌汁」は15年も続いた。他にも記憶に残る多くの人気シリーズがある。（P.7参照）

舞台の脚本も手がけ、その時々の華を映かせて今に至る、見事な生き方、作家人生といえる。

あらすじ

宮増流小鼓方、宮増小左衛門の芸養子となった小太郎は、頑なで一徹、芸一筋の義父の元で苦節15年、一人前の能楽師に成長した。しかしある日突然、義父は乱心する。友人の春藤庄兵衛もその理由がわからぬと言うが……

能・猩々乱（あらすじ）

中国、揚子の里に住む高風という孝行息子が、夢のお告げに従い、市場で酒を売ると、いつもめっぽう酒に強い者がやってくる。名を尋ねると猩々と答えた。高風が江のほとりて酒を壺に入れて待っていると猩々が現れ、舞い始める。

お能のかんたん知識

成り立ち

奈良時代に大陸から渡ってきた「散楽」が「猿楽（申楽）」とよばれる芸能になり、滑稽で猥雑な物まね劇として大衆にもてはやされた。その後、観阿弥が「曲舞」の要素を取り入れてエンターテインメントに仕上げた。評判を聞いた室町幕府三代将軍 足利義満は観阿弥息子の世阿弥の才能と美貌に目をとめる。時の最高権力者の寵愛を受けた世阿弥は上流社会の立ち居振る舞いを身につけ和漢の古典を吸収し新たな能の境地を切り開いた。曲舞…叙事的な詞章を、鼓に合わせて歌い舞うもの。男は直垂、女は水干で舞う。

能舞台

もともと野外にあり、今日のように、舞台と客席がひとつの建物の中に納まった劇場形式になったのは明治以後のこと。京都西本願寺にある能舞台は1582年に建てられた現存最古のものである。舞台奥の羽目板を鏡板と呼び、老松を1本大きく描くのが定めである。演者が登場するのが鳩掛かりと言われる廊下状の部分である。



（装束）

猩々は面、頭、唐織の壺織、緋（深紅色）の大口を着る。足袋以外は全て赤い物を使う。

壺織…上衣を大きく腰で折り、下げる。腰部が広く裾のすぼんだ形状からこういわれる。

大口…生絹で仕立てた袴の一種。

もとは楽屋と舞台をつなぐ通路に過ぎなかったが、徐々に登場、退場にも演出を凝らすようになると副舞台の役割りを果たすようになった。

能の役割

シテ方…シテ（主役）・ツレ（シテの従者）・子方（子役）・地謡（コーラス隊）・後見（作り物の出し入れ、演者の装束の乱れを直すなど進行管理役）

ワキ方…ワキ（シテの相手役）・ワキツレ（ワキの助演者）※ワキ方は面をつけず

狂言方…間の狂言を担当する。（故事を語ったり、主題を易しく説明したり、場面のつなぎ役）

囃子方…笛、小鼓、大鼓、太鼓（向かって右側からこの順で並ぶ）

楽器の紹介

笛（能管）…竹で作られている。6つまたは3つの部分をつないでいる。長さ約1尺3寸。歌口（吹き穴）、指穴7つの横笛。唯一のメロディ楽器。

小鼓…左手で持ち、調べと呼ぶ麻の紐をしめたり、緩めたりして音色に変化をつける。革は馬皮で演奏中に革に息をかけたりして湿度を調整、音の微調整をする。調いのあるやわらかい音色。

大鼓（大革とも呼ぶ）…革は馬皮、演奏前に炭火で乾燥させる。左ひざにのせて大きく強く打つ。力強く甲高い鋭い音色。

太鼓…牛革を用いる。台にすえて床に置き、2本の撥で打つ。「ツクツク」という押さえる音と「テンテン」という響かせる音の2種類。賑やかで、華やかな感じと逆に静寂な雰囲気を出す効果がある。

（参考資料）

「能楽入門」淡交社、「お能の見方」新潮社
NHKテレビテキスト「風姿花伝」NHK出版

落葉なしの 宮部みゆき

語り口の巧さ

1960年東京都、江東区に生まれる。母方の祖父は本場の川並職人(注1)。

父はテレビの時代劇が大好きで、その影響か中1で「国取り物語」にはまり、複雑な人間関係や、時代背景におおに関心をもつ。母は無類の映画好き、ハリウッドの黄金期の映画「恐怖の報酬」「サイコ」「鳥」を母の語りで聞いて育った。また父からは落語と、講談の怪談断を聞かされる。

NHK金曜時代劇「茂七の事件簿」の脚本を担当した金子成人は大学の宮部ファン、作品の語り口から「ある気恥ずかしさ」を感じ取るという。それを覚えて彼は落語家、先代金原亭馬生を思い出すと書いている。

上野鈴本演芸場で出囃子が鳴ると、幾分腰をかがめた馬生がふわりと高座に出てくる。出るが、目はキョロキョロと泳ぐようで決して客席を見ない。座布団に座り、扇子を下に置くまで見ない。その動きには「参ったな」とか「大前で話さなきゃならぬえか」というような気恥ずかしさがあったように感じていた。

宮部作品にもそんな現在ではあまり持っている人のない「気恥ずかしい」というありようがちやんとあると言うのである。

「本所深川ふしぎ草紙」には平凡な市井に生きる人々の心の間、やるせなさ、いじらしさが活写されて読む人の胸にしみいる。

20歳まであまり本を読まなかったというが、両親のおかげで物語の面白さを見抜く素養と、構成力を養ったことは間違いない。

十年に一人の逸材

数多くの作品が民放、NHKでテレビ化さ

れ、舞台、映画、漫画と脚色されているものも多くある。高校卒業後、OL生活を3年送り、法律事務所で5年間勤務。23歳でワープロを購入、練習の際、突然本人もわからぬままに、何かを打ち始め、それがどうやら小説らしいと気づく。毎夜、睡眠を削り、胸の痛みもあって、ひたすらワープロを打ち続けたという。84年から小説作法教室に通い、薦められてオール読物推理小説新人賞に応募、3回目の86年候補となり、夏樹静子氏に励まされ、意欲が湧き、87年「我が隣人の犯罪」で同賞受賞をきっかけに法律事務所を辞め、時間の自由のきく東京ガスの集金人を2年間勤める。

89年「パーフェクトブルー」初出版、ようやく専業作家となる。自身の弁では、書き始めるとどこからかストーリーがおりてきてワープロが書いているような感覚が続いていたことがあると言う。知人に「いつもワープロにしめ縄を張って挿んでいるのでは」とその頃、言われたと語っている。

本所深川ふしぎ草紙

20歳から本格的に本を読み始め、ステイヴン・キング(注2)に出会い、映画的な描写力、ものすごいイメージの喚起力のある文章に影響され、これが短編の良さを作りあげるとなった。池上冬樹は解説の中で、「短編集で1冊を選ぶなら、迷うことなく『本所深川ふしぎ草紙』を選ぶ」という。

小説のモチーフは作者が品屋にしている人形焼の店「山田家」の包み紙だそうだ。包み紙に本所七不思議の絵が描いてある。それに触発されて作者は七つの短編を書き上げた。

どれも何度も読みたくなる名品ぞろいだが、「落葉なしの樵」は父と娘の情愛を描き、落葉がじつに巧く人物の思いのシンボルとなって使われている。健気な娘の思いが落葉の美しさとともにあなたの心に届きますように。

注1・江戸深川の木場の職人。特に役師(いかにし)

注2・スティーヴン・エドウィン・キング……アメリカのモダンホラー小説家。1947年生まれ。

岡っ引は裏世界に顔がきく



岡っ引 (目明し、手先、御用聞き)

同心の手先として、自分の下っ引とともに犯人の探索に当たる。事件を聞き込むと、同心に報告して指示を仰ぎ罪人を捕縛する。本来は十手も買えないので、自分で作るものもいた。ただしめったに持って歩かない。目明しということが知れたのでは密偵にならないからだ。テレビの時代劇にでてくる岡っ引とはずいぶん違う。同心からわずかの小遣いしか買えず、ただ働き何然だが、女房を買って湯屋、薪屋、鮎屋など始めたいと報告して同心から祝い金を貰う。もともとは無職でぶらぶらとしていたり、やくざや元囚人などが多かった。岡っ引の中の大親分に入りに下っ引をしながら仕事を覚え、勘の良さと行動力のあるものがやがて同心から認められ、探索を頼まれる。同類の悪人たちの顔や動静を見知っ

(参考資料)「江戸町奉行」学習研究社
「時代風俗事典」河出書房新社
図説「江戸の司法・警察事典」柏書房

ているので耳目となって働くのに重宝された。

「岡」というのは「ちよつとした」「仮の」という意味の江戸の俗語。

岡惚れ…情人のいる女に横恋慕すること。
岡妬き…自分に関係のないのに他人の仲のいいのを妬むこと。

岡場所…官許の吉原以外の私娼地、深川、築地、品川、新宿などにあった。
同心…江戸の町々を見回る犯人探索の熟練者。南北奉行所で計200人程度。

島帰り (遠島)

遠島は死刑につく重い刑罰。刑期に終わりのない終身刑。最も流人が多いのは「島も通わぬ」と言われた八丈島。年に2回しか船が来ず島民も常に食料不足。凶作時は貝や海藻、山野草を争って採した。数百人の餓死者がでたこともある。

「歴史考証事典」新人物往来社
「江戸町奉行」三一書房
「江戸の二十四時間」河出書房新社

平岩 弓枝 主な受賞歴

- 1959年 直木三十五賞【鑿師】
- 1979年 NHK放送文化賞
- 1986年 菊田一夫演劇賞大賞
- 1989年 日本文芸大賞
- 1991年 吉川英治文学賞
『花影の花一大石内蔵助の妻』
- 1997年 紫綬褒章
- 1998年 碧池寛賞
- 2008年 毎日芸術賞【西遊記】

ドラマ脚本

- 『ありがとう』シリーズ(1970年~1973年)
- 『肝っ玉かあさん』シリーズ(1968年~1972年)
- 『女と味噌汁』シリーズ(1965年~1980年)
- 『下町の女』シリーズ(1970年~1974年)
- 『新平家物語』(1972年)

宮部みゆき 主な受賞歴

- 1987年 オール読物推理小説新人賞【我が隣人の犯罪】
- 1989年 日本推理サスペンス大賞【魔術はささやく】
- 1992年 日本推理作家協会賞【龍は眠る】
- 1992年 吉川英治文学新人賞【本所深川ふしぎ草紙】
- 1993年 山本周五郎賞【火車】
- 1997年 日本SF大賞【蒲生邸事件】
- 1999年 直木三十五賞【理由】
- 2001年 毎日出版文化賞特別賞【模倣犯】
司馬遼太郎賞【模倣犯】
- 2007年 吉川英治文学賞【名もなき母】

テレビドラマ化された主な作品

- 1990年 魔術はささやく
- 1991年 サボテンの花
- 1994年 レベル7・空白の90日
- 1994年 龍は眠る
- 1998年 蒲生邸事件
- 2001・2002・2003年 茂七の事件簿ふしぎ草紙シリーズ
- 2014年 桜ほうさら